

トランプ政権の 危険な決意

【トランプ大統領 就任一カ月経過】

トランプ政権は、どうやら非常に重大な決意をしたようである。

この決意は、湾岸戦争以来の重大な決定となる可能性が高く、しかも、それがアジアで起こることを考えれば、日本における安全保障と平和に関する、最も重大な画期となる可能性が高い。

その最も重要な事件が、米中電話会談であった。

一般には「中国にとって日本は敏感な問題である。中国の神経を逆なでしないよう、日米首脳会談の前に米中電話会談を実現すべき」とされている。日本にとって、中国が敏感な問題ということは考えなかった。

この会談は、レックス・ティラーソン国務長官がトランプ大統領に進言して実現したもの。そのティラーソン国務長官に、ある人物がこのようにアドバイスした — という。

しかし、実際の筆者の情報では、むしろ米中の急な接近はむしろトランプ政権の不退転の決意を示している。

そして、いかにも急なトランプ政権の「中国はひとつ」への転換は実は「もし米国が北朝鮮の核施設を破壊しても中国は反対しない」という言質を取るためであった可能性が高い。

【直接的な安全保障上のリスクは徹底的に排除】

トランプ政権において、国防長官に就任したジェームズ・マティスのアジア歴訪は、一般にトランプ政権の軌道修正、つまり日韓の放置から「同盟の確約」に戻った、とされている。

しかし、それは非常に表面的な現象を見ただけに過ぎない。

実際には、北朝鮮がICBM（大陸間弾道ミサイル）や核兵器を持ち、それが米国を標準できるということに耐えることができない米国がいる、ということである。

この時参考になるのがキューバ危機の時の米国であろう。この危機が発生した時の米国大統領は、かのJ・F・ケネディであった。

1962年10月、米国のU2型偵察機がキューバの空撮を行ったところ、ソ連によって建設中のミサイル基地が発見された。この時ケネディは、この危険性を取り除く為にキューバ海域を軍事的に封鎖することを決意した。艦艇200隻に、航空機1200機を動員したのである。

これはありえないほどの動員であり、事実上の戦争の決意であったとすらいえる。核戦争のリスクが決して低くない状況でも、米国は差し迫った危機に対してはここまで対応するのである。

しかも、北朝鮮に無駄に時間を与えてしまったのは、トランプ政権の大嫌いなオバマ政権であり、その過失であると認定したい。そのためには、いかに北朝鮮に差し迫った危機があるのかを明示する、いや、もっと言えば結果でもよい。

【第二次朝鮮戦争の覚悟】

つまり米国は非常に近い未来に北朝鮮の核兵器を破壊する意思がある。

したがって、その共同の敵——現時点では核武装間近の北朝鮮と、あなた方は共に戦う決意があるのかと各国に確認しに来た、というわけだ。

決戦するときに、米国が同盟軍に裏切られてしまったらシャレにならない。ある意味、同盟国を脅しにすら来たというのが、マティス新国防長官の旅の最大の目的だったのだ、といえる。

そもそも、マティス長官には「狂犬」(Mad Dog) という異名がある。

彼が韓国へ向かう際、核戦争用の空中指揮機——別名「最後の審判の日の飛行機」(Doomsday Plane)の中で「日本は心配しないが、韓国は何を言い出すかわからん。場合によっては日米だけで北朝鮮に対峙しなくてはならない」と語った、というまことしやかな噂が流れている。

筆者はそこまで言ったかは不明だが、本音が底近い可能性はとても高いと思っており、おそらく韓国が米国に協力しなくても、一気に北朝鮮の危険な兵器を潰すつもりでいると考えている。

というも、そうでもなければ、中国というトランプ政権の最大の仮想敵国に塩を送るとは考えにくいからだ。しかも、ICBMや核兵器を日米に標準を当てている現在、米国にとって — 日本にとっても — 緊急の課題は、指導者を含め信頼のおけない北朝鮮だ。

実際、国防総省の発表資料を見ても、マティス長官の発言は「北朝鮮の核」だらけ。いかにトランプ政権の国防上の関心が北朝鮮の核兵器にあるのか、ということがわかっていうものだ。

【方針転換】

つまり、米国は当初、日米同盟を主軸に中国封じ込めを考えていた。そのためにプーチン政権とすら取引をするつもりであった。そうすれば、仮想敵であったインドとの強力な連携は考え難く、中国はユーラシア大陸でも海洋でも包囲されてしまう。トランプ政権は地政学的にそうした封じ込め戦略を当初考えていた可能性が高い。だが、北朝鮮の核兵器を抑え込む必要が緊喫の課題となってきた。しかし北朝鮮の背後にある中国軍と軍事紛争を起こす一つまり第三次世界大戦勃発を意味する一ところまで踏み込めない。北朝鮮を攻撃しても、中国が手を出さない、という保証がほしい。そのためには中国に妥協をしてもよい—というわけだ。

【中国も乗り気になる？】

こうした理想主義とは程遠い現実主義的な行動は米国ではニクソン・キッシンジャー以来であり、帝国主義的とも、ヒトラー・スターリン的ともいえるだろう。こうした非情な論理は中国人、あるいは中国共産党にはわかりやすいようだ。ポーランドを崩壊に導くため、独ソが手を結んだように、手に負えない北朝鮮に困った中国が、ある一定の取引 — つまり朝鮮半島の軍事バランスを崩さない、韓国による北朝鮮支配を許さない — などの妥協をした上で、北朝鮮の核兵器破壊を容認する可能性は充分ある。勿論、代わりにTHAADミサイル（終末高高度防衛ミサイル）の配備を先送りするかもしれないし、場合によっては朝鮮半島の軍事的中立化にすら賛成する可能性すらある。米国は日本と違い朝鮮半島が中立化しても恐怖が差し迫っているとは言えない。一方、中国は米国に押しまわられて最新設備が次から次に登場する韓国は目の上のたんこぶ。北朝鮮の一部兵器を破壊するだけで中立化できるならば御の字であろう。

【本当の貧乏くじを引くのはだれか】

それでは日本はどうか。場合によっては共同で北朝鮮軍と戦う必要が出てくるかもしれない。日本が米国の要求を断るのは非常に難しい。

朝鮮半島の平和は、日本にとって死活問題であり続けているし、そのためには、少なくとも経済的援助並びに後方支援は必要があるだろう。

その上で、結果北朝鮮に対する勝利が「韓半島の中立化」であれば、最前線がある意味対馬海峡まで後退する。これは日本の地政学的リスクを一気に引き上げかねない。それとも完全な韓半島の中立化が図られてしまえば、韓国経済の崩壊リスクも含め、大きな経済的影響を日本に与えそうである。それはおそらく、ポジティブな方向になるとは考えにくい。本当の貧乏くじを引くのは日韓となるかもしれない。

注意しておく必要がある話ではないだろうか。

ガデワニカル

2月続落でも3月V字

日米首脳会談はトランプ氏の無理難題、無茶振りは息を潜め、双方思惑を秘めながらも、親密ぶりを世界にアピール。同時にトランプ氏は安倍首相との会談前にちゃっかり中国にも愛想を振りまく始末。日中を天秤にかけながらの取引はやり手のビジネスマンと言った感じだ。

日経平均はしんしん会談を受け、週明けギャップアップ。ただ前週10日の大幅上昇は「相場は既に知っていた」ということで、13日以降は材料出尽くしで売られ、週末には19,100円台まで下落した。

先週述べたギャップはここまでのサポートになっている。即ち、「先週の日経平均は19,000円を挟んだ展開から週末はギャップ(18,991～19,193)アップ。このマドは重要なサポートになりそう。今週これを埋めるようであれば、これまで紹介してきたフラクタルの弱気相場が懸念される」。

今週、維持されれば、上昇再開のシグナル。13日の高値を更新すれば、2万円の太台に乗せてくるだろう。高値更新に失敗すれば、ギャップアップに対しギャップダウンの返礼が来る。

今週のどき押し

短期的には下げのターン

米国株式市場が更に史上最高値を更新した先週、ブルームバーグは米国に本拠を置く世界最大の資産運用会社ブラックロックのファンド運用者に取材。市場参加者が現在の金融市場を楽観視しており、世界の潜在的な政治リスクが相場に反映されていない点を指摘。「あらゆる政治リスクを考慮すると状況が悪い方向に進む可能性はある」とした上で、安全資産として金需要が高まっていることから、ポートフォリオに金を組み入れるべきではないかというコメントを17日の電子版に掲載した。

確かに、金は着実に上げ続けている。当欄で買い推奨しているユーロドルとは本来連動性があるのだが、欧州通貨には欧州選挙やBREXIT、ギリシャ問題等が足枷になっているのか、こちらは2月以降下降線を辿っている。恐らく、金は昨年12月、ユーロドルは1月に長期相場サイクルボトムをつけた。今は、ここからの上げの短期修正場面と見ている。ユーロは一足早く修正場面に入っただけで、そのうち金も修正入りするだろう。

今週の主な予定・経済統計

2月20日(月)

- ・ユーロ圏財務相会合
- ・トウスクEU大統領 ペンス米副大統領、共同記者会見
- 【米国】プレジデントデーの祝日で株式・債券市場は休場

2月21日(火)

- ・2月の独・ユーロ圏製造業PMI速報値
- ・EU財務相理事会 ・米地区連銀総裁が各地で講演
- ・米2年債入札 (260億ドル)

2月22日(水)

- ・2月の独IFO景況感指数(109.7の予想、前月は109.8)
- ・米FOMC議事録公表(1月31日～2月1日実施分)
- ・1月の米中古住宅販売件数(555万戸の予想、前月は549万戸)
- ・米5年債入札 (340億ドル)

2月23日(木)

- ・米7年債入札 (280億ドル：入札合計は880億ドル規模)
- ・米週間新規失業保険申請件数 (前週は23.9万件)

2月24日(金)

- ・1月の米新築住宅販売件数(57.5万戸の予想、前月は53.6万戸)
- ・1月の米ミシガン大学消費者信頼感指数・確定値 (前月は95.7)
- ・【日本】プレミアムフライデー実施

本欄は強気を維持すると予想。しかし18,990円以下で引ければ96年のフラクタル(下図)が復活するので注意。即ち「細かく見ればチャート上、96年2月頭に若干の押しが入っていることに注目。…その後もう一度上昇して高値をつけた後、3月中旬まで続落波動が96年版フラクタルが指し示した絵図」。「もう一度上昇して高値をつけた後」が今回の13日高値と合致していれば、3月中旬までの続落波動が再現。18,500円以下の動きはこのフラクタルを警戒するが、その下げは絶好の買い場になろう。



そのユーロドルが、現在「放れにつけ」の膠着場面に入った。先週15日、相場は1.0521まで下落。これは1月3日の安値1.0341からの上げ幅の50%訂正水準(1.0584±0.0029)。更に翌16日に急反発したので、ここは買い場であった可能性がある。しかし、相場は翌17日に急反落。23日、69日両移動平均の間で引けた。これで目先の方向性が判らなくなってしまった。

この相場は、昨年5月高値を起因とした下降チャネルラインの中で推移しており、現在の値位置はその中間地点。更に昨年12月8日と2月2日の高値を結んだラインと、先述1月安値と先週15日安値とを結んだラインとで三角保合いになっている。従って、現在相場は移動平均だけでなくチャートパターンの「放れにつけ」の状態になっているといえよう。

筆者自身は弱気と見る。日柄的には上記1月3日の安値から今週は7週目。先週も「8～9週目に金星逆行の開始日(3月4日)が重なる点に注目したい」と記述したが、ここに向けてもう一度下げるのではないか。その際、1月末から2月頭の逆パターンのような15日スローストキャスティクスの動きを作りつつ、13日安値を割り込んだ場面が真の買い場になると見る。



今週の相場風林語録

一と足踏みはずす時は皆表裏になる事

数カ月、うまくいった時、勝ちに乗じて欲を出すと、ちょっとしたきっかけで、テレキ、テレコとみな、裏表になってしまうから、利の乗った時はただ無難に取り留めること。

今週の**九星★波動**

ドル押し目買い転換

南雲 紫蘭

尖閣諸島の共同宣言への折り込み、為替相場への言及なし、自動車産業への言及なしなど、如何にも「日本の大勝利」のように見える日米首脳会談でした。

しかし、実際には「米国第一」を目指すトランプ政権の武器にもなりうる「公正」や「相互補完的」の言葉が並び、日米FTA（自由貿易協定）を想定させる文言も盛り込まれました。

実際の日本経済が外需頼みの現状を考えれば、「トランプ大統領就任による影響で、設備投資の先行きは不透明感が高まっている」「大手企業の海外拠点戦略の見直しによる影響を危惧する中小企業」など、企業のDI（業況判断指数）が落ちても不思議ではない状況となっています。

もうひとつ、日米間の共同声明に明記された「相互補完的な財政、金融および構造政策という3本の矢のアプローチを用いていく」という表現にも注目しています。

相場指南道場

トレーダーあすなろ物語 (383)

中原 駿

上野が打ち合わせに登場した時、米国の金利は上昇を開始してすでに半年が過ぎていた。しかし、短期金利の引き上げだけに終わると思っていた市場参加者はなかなか長期債を売らず、結果的に、長期金利はほとんど上がらなかった。

その時、市場参加者は大きく二つに分かれた。一つの、かつ支配的な意見は、基本的に米経済は弱く、FRBは米経済を過大評価している、というものであった。

FRBが間違っているということは、市場参加者は正しいのであり、短期金利はすぐにでも下がる可能性があり、その先は短期金利も下がるのであった。

であれば、長期金利が下がれば値上がりする米国債を売る理

第六感の調整か上抜けか

テクニカルアナリスト 葛城 北斗

レンジ相場の香りたなびく如月相場

ドル円相場は1月末以降の下降ウェッジを上放れ、先週は115円近くまで上伸。しかし週末にかけてはそれまでのドルの強材料となった融和ムードの日米首脳会談、タカ派的なFOMCを終え、材料出尽くし感から週末にかけて調整している。

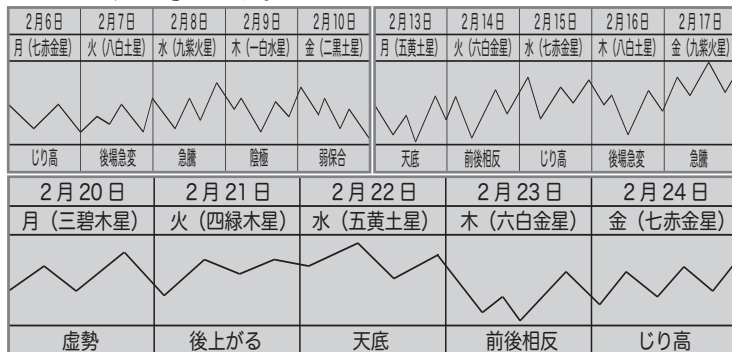
7～11週サブサイクルは2月7日に延長してボトムをつけたと考える。ただテクニカル的には最初の上昇トリガー的な動きは2月15日115円手前で終わった可能性がある。この高値は下降ウェッジの始点（1月27日）近辺でもあり、最初の上昇が止められるポイントでもある。同時に1月17日以降の保合いレンジ内の2つの高値（1月19日、27日）を結んだラインに阻まれた。

この時点でこの上値抵抗は3ポイント上値抵抗となり、次の挑戦では上抜ける可能性が高まり、週足引け値ベースで上抜ければ1月3日の年初来高値に挑戦する動きを見せよう。従って、順張りを好む投資家はこの上値抵抗突破からロングを仕掛けていくのも良いだろう。逆張りの投資家は112円台を買い拾いたい。

ストップレベルについては先週次の通り述べた「これがボトムであればロングのストップを前回の110円割れから111.50割れの引け値に引き上げる。次の下げでこれを下回るようであれば、さすがに方針転換。ドル売りに傾ける。上昇トレンド入りならば、昨晚の急騰の起点112.24を下回らないはず」。

ここでは単独で「金融」という単語が明記されました。それが「相互補完的」という表現により、日本の金融政策に関して、米国からの注文が入る余地を作ってしまったのです。

さて、九星高下伝的には、ドル高に転換すべき時に転換したといえます。月盤《八白土星》は「後場急変」という星。2月の2月の安値が底割れするまで、相場は押し目買い姿勢が妥当なのでは、と考えます。



由は全くないし、長期債の買いポジションは維持したまま、さらに金利が大きく落ちる短期ゾーンにも買いを入れるべき、となる。つまり全イールドカーブに対して強気なのだが、特に短期ゾーンのヘッジ外してさらにロングにするべき、という意見であった。

しかし上野は、もう一つの考え方であった。

つまり、米金利の上昇はまだ終わっていない。結果として、短期金利はさらに上がるし、長期金利も一定程度は上昇するであろうという考え方である。

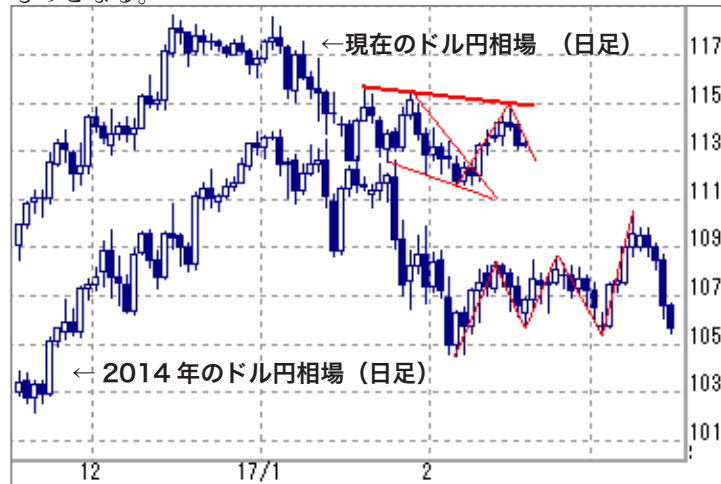
かといって、ここでポジションを閉じる理由はなく、むしろ長期債は利上げ期待で下がったところを買い、そのリスクは短期金利を売ってヘッジしておく、という戦略である。

両者とも、長期債には強気であったという点では共通していた。しかし相場展開の期間認識にはズレがあり、特に短期ゾーンに関して、意見は真つ二つに割れていたのがあった。

この方針を貫く。

もう一つのパターンとして、ボトム打ち後のサイクル位相は、これまで述べた2014年版のレンジ相場の可能性も残されている。下図が2014年版と並列したフラクタルチャート。2014年2月中旬のへこみが現在の調整と良く似ている。であるなら、この下げは高値から3～4日で終わろう。

ストラテジーは前回112～113円のロングを利食いした投資家は「サブサイクルの上昇期間を3～5週と設定して、押し目はどこでも買い。ストップは111.50以下の引け値。また115円台では一部のロングを利食いしておく」と述べた。このストラテジーを継続。尚下のチャートは上が現在の相場、下はカレンダー月は同じだが、年は2013年から14年にかけてのものとなる。



サイクルだけ話します。

— メリマン・サイクル理論 備忘録 —

【第28回】NY白金のサイクルについて(3)

これまで16年から8年、8年から4年とサイクルを解析し、08年10月から節目となる安値が19カ月、19カ月、18カ月、18カ月…という間隔になっているところまで前回述べました。

これは、4年サイクルが3つの16カ月(±3カ月)のサイクルに分割されている事を意味し、これを週に換算するとおよそ208±35週のサイクルが、3つの70±12週のサイクルで構成されているという事になります。そこで実際に数えて見ました。

08年10月27日の安値752.1ドルを起点に81週、84週、78



メリマン通信 — 金融アストロロジーへの誘い —

改めてトランスレーションとは

水星や火星などのそれと違い、木星以遠の外惑星(木星、土星、天王星、海王星、冥王星)間で主要アスペクト(0度、90度、120度、180度、240度、270度)が発生する回数は少ない。惑星アスペクトもまたサイクル、しかも長期サイクルの節目だ。

更にこの惑星サイクルの節目は、長期相場サイクルの節目になりやすい。また、このような節目と太陽や水星、金星、火星がなぞるように連続して主要アスペクトを形成する時も、相場の節目になり得ると共に本編に対する予告編のような効果が。

これが「トランスレーション」。今週22日、火星は冥王星とスクエア。27日に天秤座とコンジャンクション、木星とオポジションを形成。木星・天王星・冥王星のT字スクエアを火星がなぞる「火星トランスレーション」が発生。この現象、実は1月7～12日に太陽で同じトランスレーションが起きている。

週で安値が出現しており、中間の日柄が通常より2週延長されていますが、トータルでは243週。従って13年6月28日の安値1,295.4ドルは4年サイクルボトムという事になります。

問題はここから16年1月21日の安値811.4ドルまでの日柄がトータル134週、分割すると78週と56週になる点。ただ、長期サイクルボトムをつける際、内包するサイクルはしばしば歪み(短縮か延長)が生じます。また相場は昨年3月に35週移動平均(70週の半分の日柄)を引け値で上抜けました。これは16カ月サイクルの底打ちシグナル。従ってここは短縮サイクルボトムであったと見る事が出来るのです。現在はこの35週平均が重要な相場判断指標になっていると筆者は考えます。

では、1月7～12日に相場はどう動いていたのか。

先ずドル円相場ならびに米ドル指数は、12月中旬からの保合いを経て、1月3日の高値から同月17～18日まで下落。そこから一旦保合うも、2月にもう一段下落後反転上昇した。ユーロ円相場も同じような保合いを経て1月9日の高値から同月17日まで下落後反発。27日まで上昇した後に反落。2月7日まで下落後反発。日経平均もこれらと同じような線形になっている。一方、ユーロドルは1月3日の安値から2月2日まで一本調子で上昇。金も16年12月15日の安値から1月18日の高値まで一本調子で上昇している。

1月7日は土曜日であったので、相場によっては週の前後の違いはあったが、太陽トランスレーションの序盤は為替市場の短期的な転換点になっているかも知れない。もしそうであれば、今週2月22日前後の時間帯は目先のトレンドが反転するポイントとして注意すべきか。少なくとも反転の流れは翌週27日、もしくは来月の金星逆行ウィークまで続くかも知れない。

高く仕入れて安値で投げる投資家から 脱却してアクティブブシニアになろう！

四半世紀以上、投資の最前線で活躍してきた
「プロ中のプロ」が語る現在の株式市場とは

- ◎マイナス金利時代に株を持続
けて成功する秘訣を解き明かす
- ◎10倍になる株など豊富な実例
で銘柄発掘の心得を公開！
- ◎株式投資の実践編として〈有望
銘柄掲載〉！



株で資産を蓄える

～バフェットに学ぶ失敗しない長期株式投資の法則～

S・アダチ&カンパニー

代表取締役社長

足立 真一 著

発行：開拓社 定価：1,296円(税込み)

WEBサイトより一足早く、1週間分まとめ読み！！

今週のアストロロジー info

- | | |
|----------|---------------------|
| 2月20日(月) | レンジ内での上下動 |
| 2月21日(火) | 理論よりインスピレーションが冴える日 |
| 2月22日(水) | 原油、穀物相場は転換日 |
| 2月23日(木) | 指値取り消すべからず |
| 2月24日(金) | ポジションはスクエアにして休日を過ごす |
| 2月25日(土) | トレードにも器の大小がある |
| 2月26日(日) | 保合い相場は平然と見逃せ |

FORECASTS 2017
レイモンド・メリマン 著
2017年の相場を読み解く究極の書

2017年は相場の節目か？

星を読む。サイクルを読む。市場を読む。
Feel the star. Feel the cycle. Feel the market.

フォーキャスト2017

アストロロジーとサイクルで
2017年の相場を読み解く究極の書

レイモンド・メリマン 著 秋山日輝香・投資日報編集部 訳
投資日報出版発行 8100円(税込・送料別)

簡単・便利な『投資日報オンラインショッピング』もご利用ください。

お問い合わせ・お申込みは：**投資日報出版(株)** <http://www.toushinippou.co.jp/>

〒103-0013 東京都中央区日本橋人形町3-12-11 GRANDE 人形町6F 電話：03-3669-0278 FAX：03-3668-4444